

「イエズス会士による日本の子ども教育」

小峰玲奈

目次

0 : はじめに

0-1 : 先行研究

0-2 : 日本のキリシタン大名

1 : 日本の文化を「見る」ことの必要性

1-1 : フロイスにおける日本の子ども

1-2 : 言語習得

1-3 : 布教における洋画教育

1-4 : 教会音楽の実現においてなされた音楽教育

2 : ヴァリニャーノの見た日本

2-1 : イエズス会による学校建設まで—なぜ学校を必要としたか—

2-2 : ヴァリニャーノの教育構想

2-3 : ヴァリニャーノが指示した日本のイエズス会学校の建築様式

2-4 : 教育の対象と教育方法

3 : ヴァリニャーノのみた東インド

3-1 : ゴアのサン・パウロ・コレジオ

3-2 : ヴァリニャーノが見た東インドの様々なコレジオにおける児童たちと教育内容

4 : 終わりに

0 : はじめに

本章では、1560～1590 年代を中心に宣教師が見た日本の子どもについての報告と、宣教師によって展開された教育制度の確立の検証を通じて、ヨーロッパの宣教が異文化である日本と接触した際の、日本の子ども教育について解明するのが目的である。

イエズス会宣教師ルイス・フロイスは、日本の教育において、自らの具体的な教育構想を文献に残していない。しかし、彼が書いた様々な文献から考察するにあたり、言語習得・洋画教育・音楽教育が彼の教育構想に入っていたと考えられる。しかし、これらのカリキュラムは制度化されたものではなく認識されにくいものであった。そしてそれを制度化、体現したのが、日本の文化を尊重することに重きを置き、学校の建築様式や教育システムを確立させたアレッサンドロ・ヴァリニャーノである。日本の子ども教育について論じるには、キリスト教がフランシスコ・ザビエル達、すなわちイエズス会の宣教師達によって、初めて伝来した当時の日本について、政治的、社会的、また、文化的な側面からも触れていくことが不可欠である。日本におけるキリスト教をとりまく時代は、ザビエルが来朝した 1549 年から、禁教令が施行される 1614 年までのわずかな期間に刻々と変化したが、ここでは、最もキリスト教の教育施設が発展していった期間に焦点をあてていく。

キリスト教が伝来した当時の日本は、室町時代の末期、いわゆる戦国時代の最終段階を迎えていた。そして宗教改革という大きな歴史的背景の中で、キリスト教の布教のために多くのヨーロッパ人が日本を訪れている。この戦国時代末期から、安土桃山時代にかけて来朝した外国人の中で、当時の日本の政情や事件、風習文化について最も多くの記録を残したのが南欧出身のカトリック宣教師たちであった。しかし、イエズス会宣教師の研究において、彼らが自分達の教育観に照らして日本の子どもをどのように考えていたのかについての先行研究は少ない。

また、キリシタン研究においても、江戸時代の禁教令の関係で日本側の史料は究めて数少ないものとなっている。本研究では具体的に、イエズス会宣教師ルイス・フロイスの残した日本の記録と、日本において教育制度を確立させた巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの残した日本の記録を主たる分析対象にし、当時の日本の子どもの状況とそれについての宣教師の見解について検討し、子どもと教育という観点から異なる文化の接触で生じる西洋と日本に問題があったのかを考察していく。

論文の構成としては、まず1章にフロイスについての考察を記す。フロイスの見た日本の子どもを中心とし、フロイスがどのような教育構想を持っていたかを考察していきたい。フロイス自身が自らの教育構想について言及をしている文献は今のところ発見できていない。また、他でこの事について言及している研究者も見られない。これは、教育に対して彼自身の見解をのこさなかったこと、そして、彼の構想は制度化されていないものだけに認識されにくかったという事が考えられる。フロイス自身の教育構想に、彼自身が言語習得や、図像教育、音楽教育、を意識していることは、様々な文献からも確信している。この事をふまえ、キリスト教を日本に伝えるためにそれを教育論としてフロイス自身が持っていたとしても、教育に対しての自身の見解を残していない為に、制度化されていないものだけに認識されにくかったという事を検証する。

そして2章では、それを制度化するのに務めたアレッサンドロ・ヴァリニャーノによる子ども「教育」の確立について検証していきたいと思う。日本の学校の建築様式や、教育の対象者、時間割などを研究する事により、西洋の宣教が異文化と接触した際の問題点や疑問点を明らかにすることができると考える。

1章で扱うイエズス会宣教師ルイス・フロイス¹は、1563年に来日して、西日本各地を転じて見聞を広め、日本の風習に並々ならぬ関心を持ち観察し記録し続けた人物であり、初めて触れた日本の風物、文化、社会、習慣についての感想や体験談を『ヨーロッパ文化と日本文化』といわれる本の中に残している。これは、ヨーロッパ人と日本人との文化の違いを扱った最も古いもののひとつである。フロイス、ヴァリニャーノ、ないしイエズス会士は日本の子どもについてどのように思っていたのであろうかという点を明らかにするために、本研究は当時の日本における子どもの教育や風俗を比較対象として設定する。また、ルイス・フロイスが活躍した1560年代～1590年代を中心に、現在の長崎県にあたる肥前地方の地域、肥前のキリシタ

¹ フロイスは、1532年ポルトガルリスボンに生まれ、16歳でイエズス会に入会している。その後、インドのゴアにわたって日本伝道に出発しようとするフランシスコ・ザビエル、及び最初に見る日本人ヤジロウに出会っている。1563年7月6日、他の仲間とともに肥前、横瀬浦に上陸し、10カ月日本語の研究に従事、以後九州の大村領、有馬領、松浦領を訪問した。1565年には京都に赴き、関西地方でも10年間宣教した。その後九州へ戻り、活動を再開している。1592年10月～1594年にかけてアレッサンドロ・バリニャーノ巡察師に同行し、マカオにも滞在したが、その他の期間は九州の各拠点を転々とし、老後は有馬領に滞在、母国ポルトガルに帰することなく1597年に他界している。

ン大名である有馬や大村の領有していた地域の子どもについての考えを、書簡などの事例を用いていきたいと思う。ヨーロッパのイエズス会士が日本の大名の領土でどのような活動をしていたかを検討する事により、おのずと子どもへの視線も分かるであろう。また、それを見る事により、日本の子どもの事情がヨーロッパの教育と同じように写ったのか、異なっているとすればどのような点においてであったかを知ることができる。主な比較対象として肥前地方を選定した理由の一つは、肥前が西洋人にとっても日本人にとっても最も重要な貿易場であったことをあげる。キリシタン大名として名をはせる大村や有馬はこの土地を領有しており、フロイスら宣教師たちのおこなったことや彼らの教えの受容について知ることができる。

教育制度については、日本の布教活動に力を入れ、日本の教会を危機から発ち直し、新しい宣教方針を決めた、巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノによって知ることができる。

彼は、来日当初からすでに、日本の教会を発展させるための壮大な全体計画を考えていた。その一つに教育事業の遂行があげられる。日本の教会を担うべき日本人の司祭の育成こそが、教会の発展に繋がると考え、その為には子ども期からの教育が必要であると考えたヴァリニャーノは、セミナリヨという教育施設の建設に力を入れた。ヴァリニャーノは、それ以前にも存在した「教室」や「寺子屋」などといった小規模で、宣教師独自の教育内容を教えるといった方法から、このセミナリヨ建設により、教育内容を統一し、イエズス会が定めたカリキュラムを導入していることから、教徒獲得のために子どもの教育に着目していたことは確かであろう。キリシタン時代における日本のイエズス会の学校の教育の歴史を概観し、イエズス会のもつ教育理念が、日本という未知の世界において遂げた展開を解明することを目的にすることによって、日本におけるイエズス会の教育施設が、ヨーロッパにおけるイエズス会の教育施設の伝統をどれくらい受け継いでおり、またどのような点で異なり、彼らの日本社会への「適応」が窺われるのかを明らかにしていきたい。そしてこのことにより、当時のイエズス会士たちが日本の宣教と教育との場をどのように位置づけていたかも明らかになることと思われる。

また、「適応」という手法を用いた点において、一つの興味深い彼らの意図を読み取ることができた。それは、彼らイエズス会には決して支配意欲はなかったということである。元来、宗教の布教と侵略、支配は切っても切り離せない関係であった。

ゲルマン民族の宣教を見ている、フランク国民は強制的にキリスト教徒にされているなど、強制的な改宗や受洗は昔から当たり前に行われてきた出来事であった。日本においてもそれは例外ではないと考えられるはずである。なぜなら、イエズス会が日本へやってきた時代、つまり、宗教改革時代の外国宣教には、おもにスペインとポルトガルのローマ・カトリック教会や修道会が携わった。つまりそれは、当時海外に植民地を有していたのがおもにこれらの国だったことを意味している。キリシタン布教は、ポルトガル・スペイン両国が海外に進出した、言わば大航海時代の所産であった。事実、キリシタン宣教師が日本で教会活動が出来たのも、イベリア両国の勢力が遠く極東にまでおよんできたからに他ならない。両国の勢力を離れて当時のカトリック布教はありえないし、また、イベリア両国の海外発展も、そもそも教会の精神的権威を後ろ盾にしたものであった。²ポルトガル・スペインは航海・征服・植民・貿易といった世俗的な事業を推進し、その一方でカトリック教会はその住民の改宗を目標としていた時代なのだ。それにも関わらず、ヴァリニャーノは、『日本巡察記』の中で、「日本は外国人が支配していく基礎を作れるような国家ではない。外国人は日本においていかなる支配権も管轄権も有さないし、将来とも持つことはできない。したがって日本人を教育した後に、日本の教会の統括を彼らに委ねること以外には考うべきではない。³」と日本に対して明らかに純粋な宣教のみを遂行し、必要な教育を施した後は手をひくべきたとする考えであったことがわかる。自らの語学や文化を強制し、支配して宣教するのではなく、逆に宣教地の語学も共に学び、文化、社会に適応し宣教するといったこの手法は、日本という独自の文化と社会でなりたっていた国において最も有効的な手段であったであろう。

その点をふまえ3章では、イエズス会が日本に来日する前に東インドでどのような布教をしていたのかを述べていこうと思う。遠い島国である日本を彼らが賞賛したとき、そこには必ず比較対象となる別の布教地があるはずである。ヴァリニャーノは日本に来日する以前に東インドで布教活動をした際、『東インド巡察記』においてイエズス会インド管区の擁する主要布教地の政情・風俗・文化および布教上の

² 「A Igreja Cristã no Japão e os Poderes Unificadores Japoneses nos Séculos XVI e XVII キリシタンと統一権力」高瀬弘一郎 Tradução portuguesa por Hino Hiroshi 琉球経済大学論集 41(2) 琉球経済大学 2006年 p.186

³ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 第9章

諸問題を「公式巡察報告書」としてまとめあげた。日本での布教時には、東インドでの反省点も踏まえられているにちがいない。日本と東インドではどのような点で子どもの教育が違っていたのかを理解することにより、宣教師達の日本の子どもをどのように見ていたのか、また、それが支配的目的であるのか否かを知ることができるのではないだろうか。日本と東インドのコレジオやセナリオの建築様式や履修科目を比較することにより、それらの問題の糸口を見つける事を試みる。

0—1：先行研究

先行研究についてまず、松田毅一氏の研究なくしては、日本で現在なされている多くのイエズス会研究はなりたっていなかったであろう。松本氏は戦国時代から江戸時代初期の日欧交渉史を専門としており、『近世初期日本関係南蛮史料の研究』『大村純忠伝—日葡交渉小史』を著すほか、本研究でもとり上げたイエズス会宣教師であるルイス・フロイスが、語学力の高さを買われ、イエズス会より後進が資料とするために記した『日本史』は、あくまでもヨーロッパの人々に読ませるものであったので、非常に詳細で叙述的であり、キリスト信仰宣教時代の日本の様子を学ぶのにとても有益であった。その他にも、『十六・十七世紀 イエズス会日本報告集』や、巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの『日本巡察記』など、多くのイエズス会士の残した書簡の翻訳に携わっており、彼自身『日本史』についての研究もおこなっている。本研究で用いる文献にも彼の著訳が多くあり、『大村純忠伝』では日本のキリシタン大名などについても研究しており、その幅広い研究成果により当時の史料を日本語で用いることができ、日本のイエズス会研究では、間違いなく代表的な存在であり、その功績は大きい。しかし、日本の子ども、ないし、教育に重点をおいた研究はしていない。

岡田章雄氏は、南蛮キリシタン研究の一人者といえ、宣教師ルイス・フロイスの記した『ヨーロッパ文化と日本文化』『九州三侯遣欧使節行記』の編訳や、『キリシタン大名』『キリシタンの時代—その文化と貿易』『キリシタン信仰と習俗』『南蛮帖』『キリスト教伝道と国土侵略』など、ヨーロッパの交渉史や、日本のキリシタン大名についての執筆も数多くしている。特に『ヨーロッパ文化と日本文化』は、フロイスがもっていたヨーロッパ文化の知識を基にして、日本の衣服、食事、建築、薬、人々の様子など、様々な細かな部分を比較対象にしたものであり、当時のヨーロッ

パ人からみた日本を知るのにとっても効果的な史料である。後年は日本史の中でもあまり研究者の多くない 16、17 世紀のヨーロッパとの交渉史を手掛けたりと、その研究成果は非常に大きく、キリシタン布教についての研究において、彼の研究成果は必ず触れておかなければならないであろう。

家入敏光氏は、カトリック研究を専門としており、巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが著した日本人にキリスト教を布教する為のキリスト教教理書『日本のカテキズモ』を翻訳した人物である。「初期キリスト教ラテン詩史研究」や、「ローマカトリック教会の「禁止目録」」など、多くの著訳にも携わっている。本研究では特に、ヴァリニャーノ著の『日本のカテキズモ』がヴァリニャーノの教育構想を考察する上でとても重要な史料となった。

0-2：日本のキリシタン大名

約 400 年前、キリスト教がイエズス会の宣教師によって伝えられたが、その際、有力な信徒として貢献したのが、大村純忠⁴であり、日本最初のキリシタン大名であった。純忠は、1562 年、領内のポルトガル貿易港である横瀬浦で、重臣 25 名と共に洗礼を受け、ドン・バルトロメオの洗礼名を授かった。洗礼後、純忠は自身の領内に教会、司祭館、学校を建設し、長崎港に宣教師を招いて布教に協力、⁵また、遣欧使節の派遣にも協力し、積極的に親族、領民たちに信仰をすすめた。その結果、純忠が受洗してから 20 年後には、大村領だけでも 6 万人の信徒を誕生⁶させただけでなく、長崎を開港する事によって、近世 300 年の間、国際的な環境の中で日本の玄関となり多くの物質的利益を得、それ以外に、日本に文化的、宗教的に多くの情報を招き入れる事ができたのである。

有馬晴信は、家督を継いだ当初はキリシタンを迫害していたが、1580 年に洗礼を受けてドン・プロタジオの洗礼名を持ち、以後は熱心なキリシタンとなった。1582

⁴ 大村純忠：1533 年（天文 2 年）肥前高来の領主有馬晴純の二男として生まれる。5 歳の頃叔父である大村純前の養子となり、17 歳で大村家代 18 代の家督を継ぐ。最初のキリシタン大名であり、積極的に布教保護の方針をすすめた。また、長崎を開き国際的な交流を養った。

⁵ 池田敏雄『人物中心の日本カトリック史』サンパウロ 1998 年 p.28 片岡弥吉『長崎の殉教者』角川選書 1970 年 p.144

⁶ 当時全日本のキリシタンは 15 万人。大村領だけで日本全国のキリシタンの四割を占めていたことになる。片岡弥吉『長崎の殉教者』角川選書 1970 年 p.150

年には大友宗麟や叔父の大村純忠と共に天正遣欧少年使節を派遣している。

純忠、晴信と共に、16世紀の戦国時代から豊臣秀吉の時代にかけて有名なキリシタン大名の中に、豊後の大友宗麟⁷があげられる。幼少期より広い視野を持ち合わせたこの少年は、領主になってからも内政、や外交に積極的で、物質的、また、精神的繁栄を求め、西洋文化やキリスト教を受け入れた。また、技芸、美術、殖産などを領民にすすめた。遣欧使節をローマに送り、日向にキリスト教都市を建築する為に努力した。⁸

宗麟は教理学校を設けて、カトリック要理の研究をすすめた。イエズス会宣教師たちは、地球儀や地図、数学器具、楽器、時計、メガネなどを使って科学を教え、天地創造や、宇宙の構造などを説明した。また、1561年に、日本最初の初等学校を設立し、子どもに宗教、読み書き（日本字、ラテン文字）、算数、オルガンやヴィオラなどの楽器演奏による唱歌、作法などを無報酬で教えていた。同年には、伝道師養成所も設けられ、宗教、日本語、ポルトガル語、音楽などが教えられている他、府内には育児院や病院、さらにコレジオ（大学）も設立され、受洗者も万を超した。⁹宗麟の改宗は、いままで貧者の宗教とみなされていた一般のキリスト教に対する考えを一変した。武士の間からも改宗する者が現れた事により、1581年には士族から2800人の改宗者を出し、数年後には5000人にのぼったという。宗麟によって、直接的であれ間接的であれ影響を受けて洗礼を受けた者は総勢7万人にもものぼると言われている。¹⁰ このように、キリスト教布教を進める上で宣教師達を取り巻く環境は、豊臣秀吉によってバテレン追放令が出されるまで、かなり厚遇を受けた者であるといえるであろう。

⁷ 大友義鎮：(1530～87年) 府内、豊後（大分）の大名。21歳の時フランシスコ・ザビエルは宗麟の保護のもと、布教活動を行っていた。晩年は宗麟と呼ばれ、天正6年に48歳の時に洗礼を受ける。宣教師たちがヨーロッパに書き送った報告書の中では、ドン・フランシスコ、またはレイ（国主）を付した名で記述されている。

⁸ 池田敏雄『人物中心の日本カトリック史』サンパウロ 1998年 p.36

⁹ 池田敏雄『人物中心の日本カトリック史』サンパウロ 1998年 p.38

¹⁰ 池田敏雄『人物中心の日本カトリック史』サンパウロ 1998年 p.39

1：日本の文化を「見る」ことの必要性

宣教師達の見た日本は、どのようなものであったか。

フランシスコ・ザビエルは、「私達が交際する事によって知り得た限りでは、この国の人々は今までに発見された国民の中で最高であり、日本人より優れている人々は、異教徒の間では見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人々で、他の何よりも名誉を重んじます。大部分の人々は貧しいのですが、武士も、そうでない人々も、貧しい事を不名誉とは思っていません。¹¹」と述べており、また、「日本人は大変立派な才能があり、理性にしたがう人たちなので、これこそ真理であると思い、信者も信者でもない人もキリストの奥義を喜んで聞きました。彼らが信者にならなかったのは、領主（の命令に反すること）を恐れたからで、神の教えが真理であり、自分達の宗教が過ちである事を理解しなかったためではありません¹²」とものべ、ザビエルは、日本人を白人、つまり、自分達と同じ理性的な魂を持ち、物事を判断出来る同等の民族であることを認めていたと言えるのではないだろうか。これは他のアジアの国では見られない評価である。そしてこの日本人観は後述する宣教師たちにも受け継がれていったのである。

イエズス会は、ポルトガルやスペイン、イタリアから志願者を集め、ポルトガル宮廷の保護のもと日本に宣教団を送っている。日本において言えば、フランシスコ・ザビエルにはじまり、フランシスコ・カブラル、ルイス・フロイス、アレッサンドロ・ヴァリニャーノなどがあげられる。カブラル、そしてフロイスやヴァリニャーノは、年報や公的な報告書を作成する任務にもついている。イエズス会のザビエルや他の宣教師達は、ヨーロッパとその他植民地にいる同胞に無数の書簡を送っており、日本など、各地域の責任者である上長は、ローマにいた総責任者の総長へ毎年報告書を送る義務を担っていた。イエズス会の報告者の中で、執筆担当した書簡が最も多く、当時の日本の状況をヨーロッパ人の視点で観察していた人物として、ポルトガル出身のルイス・フロイスがあげられる。「あらゆる文章の仕事に優秀であり、判断力も秀でていて、天性語学的才能がある。」との上長からの評が与えられていた¹³。

¹¹ 山内和 『青い目に映った日本人』人文書院 1998年 p.25

¹² 山内和 『青い目に映った日本人』人文書院 1998年 p.25～26

¹³ 川崎桃太 「ルイス・フロイスと十六世紀の日本」 p.5

35年間を日本で過ごしたフロイスは、膨大な量の日本の政治情勢や経済状況を客観的に記述し、さらには日本の文化、社会、宗教、思想、生活、風俗に関してもきわめて多くの書簡を残した。日本史上初の遣欧少年使節について記録をのこした¹⁴のも彼である。また、1581年、巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの通訳として、五畿内を旅し、福井まで足をのぼした。彼はその後、イエズス会日本年報の編者となり、上長のもとにあったが、1583年母国ポルトガルの要請とイエズス会総長の許可によりイエズス会における日本の宣教記録である『日本史』を執筆、1585年、それまで都で一人難事業に着手していた宣教師ヴィレラの許に派遣されるまでの二年間九州に留まって、日本語や土地の風習を学び、初めて触れる異国の風物、文化、社会、習慣についての感想や体験談を『ヨーロッパ文化と日本文化』でまとめた。

フロイスによると、日本の慣習はヨーロッパの慣習と全く違っており、人々と末永く接していかないかぎり理解不能のものであった。そしてこのような人々の間で最大の宣教効果を狙うには、イエズス会がまず、封建領主の恩恵を確保するべきで、そのうえでこそ人々は宣教師を敬愛し、尊敬し、厚遇するのだと論じ、¹⁵さもなければ、仏僧のようなイエズス会士の敵対者が、短期間のうちにキリストへの改心者たちを異教に戻してしまうだろうと断言していることから、イエズス会が宣教にあたり領主との関係を重要視していたことがいえる。

フロイスは、自身が日本で活動した時期の不安定な日本の政情を『日本史』において数多くの章を割いて詳細を記録している。イエズス会士は、16世紀後半の内戦中の混乱を目撃した代表的な外国人目撃者だったのである。

ルイス・フロイス最後の文献でもある『ヨーロッパ文化と日本文化』は、フロイスが持っているヨーロッパ文化の知識を基にして、日本文化の衣服、食事、建築や薬、道具など、ありとあらゆる様々な細かい部分を比較したものである。

では日本の子どもはどのように観察していたのであろうか。次の節でヨーロッパと日本の子どもの比較をいくつか抜粋し、分析していく。

¹⁴ 岡本良知訳編 『九州三侯遣欧使節行記』東京東洋堂 1942年

¹⁵ 松田毅一 『近世初期南蛮史料の研究』風間書房 東京 1967年 p.526～27、阿部隆夫 「ルイス・フロイスの日本宣教記」旭川大学地域研究所年報 第23号 2000年 p.12

1-1：フロイスにおける日本の子ども

16世紀がはじまってもなお、激しい抗争や内戦に明け暮れており、戦争や地震や台風などによる劇的な凶作はよく起こり、多くの人間が生活していくのがやっとなあり、あきらかに恒常的な栄養失調にさらされていた時代であった。最初の西洋人が目にしたのは、このような国であったと言える。

事実、この時代は劇的な変化をもたらす激しい動乱の時代であったといえよう。そしてこのような事情は、ヨーロッパからきた新しい宗教や、考え方を受け入れやすくさせる要因となり、心の余裕や安心さを与えない反面、疲れはて、不安にかられる日々の人々にキリスト教の与える希望に心を向けさせるであろう。キリスト教の布教には、イエズス会士の布教活動以外にも、このような日本が抱え持つ問題もキリスト教が広まった原因にあげられる。では、そのような時代にルイス・フロイスが目目の当たりにした日本の子ども達はヨーロッパの子ども達とどのように違っていたのであろうか。また、どのように写ったのであろうか。それは、①から21までで箇条書きにされており、それらは主に、フロイスが見てきた子どもに関する部分の報告¹⁶である。これらは至って端的に報告されており、①②③は主に風貌について論じられていることがわかる。

①では髪型についての違いを記しており、元服の頃まで日本の子ども達が髪を伸ばしていたことが伺える。また、一般的な髪型で月代を剃らない総髪の事を記している可能性も十分考えられる。

②に関しては子育ての違いが見て取れる。ヨーロッパの子どもの手足が拘束されるのは、子どもが誤って自分の手足を傷つけないように、また、正しい姿勢を保つためというヨーロッパの価値観からくるのものであった。また、ヨーロッパには歩行器などの存在が伺える。④は日常の生活からの違いに目がとまる。子どもが労働力として扱われたのは同じであるが、この事からも、日本の子ども達は家の手伝いをしながら妹や弟の面倒を見ていた事が分かる。⑤⑥は躰に関する記載である。⑤で日本の子どもは3歳で箸を使って食べるということからも、かなり早い段階で箸の使い方をしつけられていることがわかる。江戸時代にあったある言葉を参考にす

¹⁶ ルイス・フロイス著 岡田章雄訳注 『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店 1991年 p.62～69

ると、より理解が深められるであろう。『經典余師¹⁷』にもあるように、日本には「三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で未決まる」という言葉があった。この六つ躰とは、六才までに挨拶の仕方や箸の持ち方から始まって一通りの躰を済ませておけ。という意味である。また、九つ言葉とは、九才までには、どんな人にも失礼でない言葉遣いができるようにしろ。という意味であり、その事からも⑤の言葉同様早い段階の年齢に箸の使い方を習得し、⑥の日本の子どもは体罰ではなく言葉に寄っての叱責のみなのは、丁寧な言葉づかいを教えるという点においても適した方法であったと考える。この言葉は主に商人の子育てに関してのものであるが、この部分においては、商売以外にも精通している躰といえるので、日本人の持っている教育観や価値観として考える事ができるであろう。そして、ヨーロッパにおいては、子供の教育上体罰は時には必要であると考えられていた。¹⁸⑦⑧⑨においては勉学についての記述がなされている。日本ではイエズス会が布教する前、子ども達の学びの場として役割を担っていたのが寺院であった。主に文字の読み書きを学んでいたようであるが、⑨において、フロイスがした最初の仏教批判とともれる記述がされた。この事からもヨーロッパでは、唱歌、遊戯、銃剣などは教師の教えるものではないと考えられ、また、坊主が子どもたちと忌まわしい行為をしていることを批判的に記している。⑩⑫⑭⑮⑯も躰に分類することができる。⑩では口上について記されているが、日本は主従関係を基礎としている社会であり、それによりヨーロッパの子どもと違いその思慮深さなどがとてつもなく大人に近いということを賞賛している。⑫では立ち居振る舞いについても日本では早い段階で礼儀作法を教え込む概念があるため、そして⑭においても日本には甘やかすという考え方がヨーロッパに比べ著しく低いためにフロイスの目に新鮮に映ったのであろう。⑮、⑯においてもたとえ親子間や親戚間であってもそこには主従関係が存在し、礼儀を重んじ、たとえ身内であっても戦では敵同士となりうる日本の家族観を知ることが出来る。⑪⑫⑬⑭⑮⑯は主に慣習として見ていくことが出来る。⑪、⑫、⑬は、武士の容姿や慣習に関するもので、⑪は脇差をさすというものであるが、日本ではこれを含め多くの通過儀礼がおこなわれていた。また、⑯のヨーロッパでは外出時、母と共に随って行くが、日本ではそれがほとんどないということから主従関係の厳しい日

¹⁷『經典余師』須原屋茂兵衛等 1870 年

¹⁸ 森洋子『カップルと子どもの美術史』日本放送出版協会 2002 年 p.24

本での親子の距離感を感じることができる。また⑳においては財産の相続の際に隠居というヨーロッパではめずらしい慣習が紹介された。21 では化粧についての記述がなされている。化粧は古の時代から、宗教的儀式や身だしなみとして世界中でされていた慣習の一つであるといえる。日本もその例外ではなく、どの時代でもされていた。以上がフロイスが報告した日本とヨーロッパの子どもの違いについての記述である。これを見たヨーロッパの人々は日本とヨーロッパの違いに驚き、また、その文化の違いに興味を抱いた事であろう。

1-2：言語習得

フロイスは自身の教育構想に言語習得は入れられているのであろうか。フロイスの記した『日本史¹⁹』からも宣教師たちが積極的に日本語学習に力を入れていたということを知ることができる。それによると宣教師たちの知っていた日本語といえば、フェルナンデス修道士が、インドからの航海中に、かの日本人たちから教わった程度にすぎないということが書かれており、²⁰フェルナンデスが宣教師たちに日本語を教えていたことが伺える。

また、宣教するに際し、イエズス会宣教師達は、日本の宗旨について学習する必要性も重視していたのも明らかである。16世紀の日本において、文字や現在でいうところの「国語」に相当する教育は、主に寺院がその役割を担っていた。檀家の子どもたちを集めての説法や、言葉を学習するという形式であった。それは当然、宗教と教育が切っても切り離せない関係であることを意味し、布教活動のため「子どもへの教育」に着目していたイエズス会の宣教師たちは、日本に広まっていた仏教を「悪魔の教え」として否定する一方で、自分たちが日本の宗旨を学ぶことで、後に宣教師のもとを訪れる信者や僧侶たちと議論し、彼らの信仰内容を論破すること、そして説得して改宗へと結びつける為にも、日本の宗旨を学ぶことは重要視していたことは間違いないだろう。

この点においてフロイスは、「当日本地区の、特にこの都の区には彼らの学問と偶

¹⁹ 『日本史』は 1549～1593 年までを編年体で扱っており、概要としては三部までである。詳しくは尾原悟 「ルイス・フロイス考」『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究 27(4)』1979 年 上智大学紀要 p.426～を参照

²⁰ ルイス・フロイス著 松田毅一訳 『日本史 (6)』中央公論新社 2000 年 p.42

像崇拜が最も盛んな所であり、当地に駐在する司祭らには、新たに別の学問、すなわち日本の八つの宗旨を学び、研究する事が必要である。これは、その信奉者らがここ（修道院）に来る度に彼らと議論するためであり、それらの宗旨を知らず、また、宗旨の書物の根拠を多数指摘して論破することができねば、彼らは我等を軽視し、聴聞することにもほとんど感銘を受けないからである²¹。」と記しており、フロイスが、宣教師の日本語習得に力を入れていたことがわかる。

そして自身もフェルナンデスから日本語の手ほどきを受け、フェルナンデスに日本語習得のための文法書作成の必要性を説き、協力を得て作成している。宣教師たちは、布教の上でイエス、キリストの言葉と行為を伝える為、そして明白な道理をもって彼らの宗旨の誤りを示し、それに懸けている期待を完全に消しさる為に日本語および仏教を学び、それに共感を覚え改宗した日本人はラテン語やポルトガル語を学びキリストの道理やそれを広める為、それぞれが翻訳にたずさわる。このように、異なる文化が接触するとき、両者の差異は言語にあらわれる。

その為、宣教師と日本のキリシタン両者の語学習得は必須であり、日本の子どもの教育に国語と外国語を入れるのは必然的であったし、日本の子どもを教育する為にも、彼ら自身の日本語習得はとても重要であった。この事からも、フロイスが自身の教育構想として言語習得を入れている可能性は十分あり得るのではないだろうか。

1-3：布教における洋画教育

ここでは洋画教育がフロイス自身の教育構想に入っていたのかを考察する。

1549年以来、イエズス会の宣教師を通じて、かなりの数のキリスト教宗教画が礼拝の祭壇に飾られたり、キリスト教信者に贈進されていた。フロイスの1587年1月1日付下関発耶蘇会総長宛の書簡²²においては、ヨーロッパからパードレが千枚の聖画を持ってきたが、日本へ着いたときは殆ど皆無であったことにふれており、多くの聖画を持ちこもうとしていた事実も伺える。このことから増大する教会の需要に対し、ヨーロッパへ大量に注文してもそれに応えられない事柄が起きていたとすれば、日本で絵画を制作するという考えは必然的であったと言えるだろう。西

²¹ 松田毅一監訳 『16・7世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ部』2巻 p.349

²² 岡本良知『キリシタンの時代—その文化と貿易—』八木書店 p.58

洋画の基礎さえない遠く離れたこの日本でそれを行うには、日本画風に描くか、洋画家を養成するという選択が考えられるが、千年余りの伝統を有するカトリック教会の布教者が、後者を選ぶのは、必然的な理由であるといえる。その結果、ヨーロッパの絵画の模写より始められるのだが、そういった西洋画家の画像を九州三侯の使節がヨーロッパへ持っていったようである。²³ しかし、信者であるという以外には、どのような素質の日本人によって、また、どのような画材を用いられていたのかなどは、残念ながら現時点でイエズス会宣教師たちの書簡にも報告にも発見できなかった。1580年ごろから設けられたイエズス会の布教養成と信者教育の為のセミナリオやコレジオといった教育機関により、教会音楽などと共に教会用の美術の学修があったことから、聖画家の育成も行っていたことがいえるであろう。ルイス・フロイスの1591～2年の日本イエズス会年報²⁴において、現在の選択科目のような制度を用い、そこで絵画や印刷、版画などを学んでいる様子と、彼らの技術能力の高さを非常に賞賛し、セミナリオの学生の一般の学術の力が着実に進歩していることを報告している。その翌年である1593年の記述では、「セミナリオの学生のうちに画を描き金属版を掘る者のあるのは、[教会の為に]大いに役立つ事である。(一省略)幾人かのポルトガル人もそれらの画を観て、日本で描かれたとは思わずして感嘆し、後にはどう見てもローマの作品のようだというた。されば神の御援助を得て、今後は立派な画で御堂を満たし、少なからぬキリスト教諸侯を悦ばせる人がいることとなろう。彫版をするものの多くは、ローマから携来された印刻の画像をさながらに彫刻し、キリスト教信者達の大きな喜びと満足とを得て、それぞれ多数の画を印刻していくので、[最早]彼らの専業とするに足りる。」²⁵ことから、彼らの技術はローマより持ってきた画を非常に高い技術で模写し、宣教師やポルトガル人達はどちらの画がローマからのものかの識別が困難であるほどであったこと、そしてこの技術がイエズス会にとって非常に役立つものであったことがわかる。彼ら日本人修学生の模写の技術、着色、陰影などあらゆる点において巧みであり、宣教師達もポルトガル人も原画と比べてどれが原画でどれが模写かを識別することが

²³ ルイス・フロイス著、岡本良知訳『九州三侯遣欧使節行記』1942年 東京刊 下巻 p.42

²⁴ Luis Frois, Lettera del Giappone degli anni 1591 et 1592 Roma 1595. p.165 村上直次郎『イエズス会日本年報』上新異国叢書『キリシタンの時代—その文化と貿易』八木書店 1987年 p.61

²⁵ 松田毅一『日本史』 岡本良知『キリシタンの時代—その文化と貿易—』八木書店 p.62

できなかったというのは非常に賞賛的な表現であると共に、イエズス会士たちにとって非常に心強い技術となったこと、そしてその技術獲得の為に洋画教育を重要視していた事は明らかであり、フロイスの報告に対する表現からもフロイス自身の教育構想のなかに洋画教育があったということは十分考えられることであるといえる。

1-4：教会音楽の実現においてなされた音楽教育

16世紀半ば、キリスト教宣教師たちの来日は、西洋と日本の交流の歴史の幕開けと同時に、キリスト教礼拝に伴う音楽教育の最初の導入の機会をもたらした。キリスト教宣教師達が礎を築いた教育機関の中でも、特にセミナリオとよばれる中等教育施設における宗教音楽教育には目にみはるものがあり、西洋音楽教育の発展は、一般的に明治維新以後と認識されていることも多いが、本論により、この時代に日本における初めてのキリスト教音楽教育の発展をみることができるであろう。では音楽教育はフロイスの教育構想内にあったのであろうか。

歌唱教育は、音楽教育のごく最初の段階から導入されたもので、ミサに不可欠な典礼音楽、すなわちグレゴリオ聖歌が教えられた。音楽は、日本においてのみならず、キリスト教の教育機関は全て礼拝儀式と直結するものとして捉えられていたし、音楽教養を身に付けて典礼に奉仕するように年少者を育成することは、信仰教化を進める上でも重要であったから、日本のキリシタンの子どもたちにも同様の教育がなされたのである。

フロイスが記述した当時の日本における音楽文化とはどのようなものであったのだろうか。フロイスの『ヨーロッパ文化と日本文化』の中で第13章にある「日本の劇、喜劇、舞踊、歌および楽器について」という項目でまとめられている。そこでは「われわれの間の種々の音響の音楽は音色が良く快感を与える。日本の（音楽）は単調な響きで喧しく鳴り響き、ただ戦慄を与えるばかりである。²⁶」とあり、ヨーロッパと日本の音楽観の違いを記している。この事からも、宣教師の導入した音楽は、困難に満ちていた事が伺える。音楽は、日本の文化、特にその宗教的面で重要な機能を果たしていた。神話時代につながる長い音楽の伝統を有していたのである。しかし、それは西洋とは極めて異質な音楽観であった。特に西洋からきた宣教

²⁶ ルイス・フロイス著 岡田章雄訳注 『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店 1991年 p.173

師にとって日本の音楽の第一印象は極めて悲観的であった。宣教師が日本に来て初めてこれらの音楽を聞いた時、異様に感じたであろう。ある宣教師は、「日本人は我々の音楽もオルガン伴奏歌唱も喜ばず、迷信的演劇で歌う自分達の音楽を非常に好む。それは考え得るもっとも耳障りな、もっとも耳に嫌悪すべきものである。」と²⁷断言している。

アレッサンドロ・ヴァリニャーノはそれらの報告から、日本音楽について否定的、悲観的見解を表明する言葉を繰り返し、ルイス・フロイスは、西洋人である「われわれはオルガンに合わせて歌う時の協和音と調和音の音楽を重んずる。日本人はそれを姦しと考へ、一向に楽しまない。²⁸」と、このように布教初期には相互の無理解が音楽の分野であるが、次第に意志の疎通がとれるようになった。その理由として音楽教育とそれによる日本人の技術的向上があげられる。ヴァリニャーノは『セミナリオ内規』において音楽教育について、「その才能を有する者は歌い、且クラビコード、ピオラ、その他教会の典礼と儀式および教会内で行われる荘厳祝日に使用するような類似の楽器の演奏を学ぶ事。²⁹」と述べており、実際セミナリオの時間割には音楽が含まれている。

「二時から三時まで合唱と演奏に費やし、余った時間は休息する事。(音楽のために) もっとも適切な者を選抜し、教師は上達した者の援助を受ける事が出来る....³⁰」と、洋画教育同様、選抜され、演奏が上達した者は、宣教師を手伝い教師として役立てる事、「歌い、演奏出来る者はいつときの間、それに費やすこと³¹」や「オルガン、クラビコルディオ、ピオラ、その他類似の楽器の演奏や歌に費やさなければならぬ。³²」と音楽教育に熱心だった事が伺え、ルイス・フロイスが有馬のセミナリオに訪問したときの印象を記述したとき、「彼らはオルガン伴奏歌唱と楽器の演奏を学んでいる。彼らの多くは既に上達し、ミサを荘厳に歌い、既に芸術的な少年聖歌隊となっている³³」とその成果を評価している。

²⁷ 吉川弘文館刊 『キリシタン研究第十六輯』キリシタン文化研究会編 1976年 p.13

²⁸ ルイス・フロイス著 岡田章雄訳注 『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店 1991年 p.174

²⁹ 吉川弘文館刊 『キリシタン研究第十六輯』キリシタン文化研究会編 1976年 p.26

³⁰ 吉川弘文館刊 『キリシタン研究第十六輯』キリシタン文化研究会編 1976年 p.26

³¹ 吉川弘文館刊 『キリシタン研究第十六輯』キリシタン文化研究会編 1976年 p.26

³² 吉川弘文館刊 『キリシタン研究第十六輯』キリシタン文化研究会編 1976年 p.26

³³ 吉川弘文館刊 『キリシタン研究第十六輯』キリシタン文化研究会編 1976年 p.26～27

キリスト教布教にあたって宗教音楽の教育は絶対事項であった。

宗教音楽の教育を施されたセミナリオの生徒は日本における西洋音楽の発展の中心であったし、それを担ったのはセミナリオの中でも音楽教育の為に選抜された少数の才能ある日本人の少年達だったのである。

2：ヴァリニャーノの見た日本

1579年、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ³⁴が、長崎の島原半島にある口之津に入港した。ヴァリニャーノとは、いかなる人物だったのであろうか。彼が初めて来日した時、ヴァリニャーノは巡察師に任ぜられ、フランシスコ・ザビエルが来日して30年以上経った頃であった。ザビエルの意志を引き継ぎ、日本宣教での様々な行き詰まりを打破し、多くのキリシタンを獲得するという大きな目標を抱き日本へやってきた。当時の日本の教会は、経済的な危機にもみまわれ、すでに日本にやってきて布教活動を行っていた宣教師達にとって、ヴァリニャーノの来朝は救世主のごとく待ちに待ったものであったであろう。

日本におけるキリスト教布教は、マカオと日本での生糸を中心とした南蛮貿易によって支えられ、切っても切り離せない関係であった。当時日本で金銭的な苦境にあったイエズス会が、布教の為に依存できる唯一の資金源ともいえるからであるが、しかしこれはキリスト教の布教上、あまり好ましい資金調達方法とは言えない為、ヴァリニャーノは、この問題に対して、いかに日本に対する経済的援助を取り付けるかという問いも課せられていた。³⁵ヴァリニャーノの日本布教に対する姿勢は柔軟で、当時の日本布教長には、ポルトガル人宣教師のウランシスコ・カブラルが就任していたのであるが、彼との対立は甚だしく、彼らの日本人観と、それからくる布教方針には大きな摩擦が生じた。ヴァリニャーノにとって最も苦心したのは、後に記すカブラルとの対立のなかで、いかに自らの信条にのっとりた布教活動を展開

³⁴ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ：1539年イタリアのキエーティの貴族の家で生まれる。1572年にアジアのゴアで布教活動を始め、1606年マカオで死ぬまでをずっとアジアで生きた。ヴィットリオ・ヴォルピ著 原田和夫訳 『巡察師ヴァリニャーノと日本』 一藝社 2008年 p.6

³⁵ 日本・キリシタン音楽教育の原点」久留米信愛女学院短期大学院研究紀要 第30号 p.26

していくかであった。

『日本巡察記』の中でヴァリニャーノは、子ども達の理解力の高さを賞賛しており、ヨーロッパの子ども達よりも、はるかに容易に、そして短期間に我等の言葉での読み書きをおぼえる事を記している。³⁶また、日本人は忍耐強く、飢餓や寒気、また人間としての苦しみや不自由を耐え忍ぶが、それはどのような身分のものでも、年少の時からこれらの苦しみを受け入れるよう習慣づけられて育っている事にあるという。そしてヨーロッパの子どもとの違いの中に平穏さをあげており、日本の子どもとの間に口の悪い言葉や暴力はなく、極めて儀礼的な言葉で話し合い、子どもとは思えない重厚な大人のような冷静さ、理性差を持ち合わせていることに驚嘆している。

服装、食事、その他すべてにおいて極めて清潔であり、美しく調和がたもたれ、日本人が同一の学校で教育を受けたかのように見えたと記し、日本の子どもとヨーロッパの子ども達が非常に異なっていることが伺え、「我等とは、いかなることにおいても合致しないほど全てが異なっており、食事、衣服、栄誉、儀式、言語、交際、および起居、建築、家庭内での奉仕、負傷や病気の治療、子どもの教育、養育、その他すべてのことにおいて言語に絶し理解しえないほどの相違は大きく、正反対である。」の文面からもわかるように、日本とヨーロッパが、全く反対に走っている世界であることがいえる。

ヴァリニャーノは、日本の文化を尊重することを非常に重要視していたのであるが、その理由においては、日本人は独自の風習や儀礼に深く馴染み、日本人の中で異なった生活様式や態度をとると、無礼、かつ無教養なこととされる³⁷ので、ヨーロッパの風習に従ったままでいることは、日本人にとって無作法で育ちが悪いとみなす要因となり、相手にされず、信頼さえ勝ちえないという見解があったのだろう。それに反しカブラルの日本及び日本人観は全くの正反対のものであり、日本人は打算的に南蛮貿易の事しか考えていなく、日本人ほど傲慢、食欲、不安定で偽装的な国民を見た事がないとし、日本人に対して好感を持たず、布教においても力を入れることはなかった。カブラルに一貫して反発した姿勢を貫き通したヴァリニャーノ

³⁶ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.5

³⁷ ヴィットリオ・ヴォルピ著 原田和夫訳『巡察師ヴァリニャーノと日本』一藝社 2008年 p.19

の姿勢は、各地にセミナリオを設立し、実際の教育に当たる時にもおおいに発揮され、後の天正遣欧使節派遣へと続き、大きな功績を残していくことになる。

2-1：イエズス会による学校建設まで一なぜ学校を必要としたのか。

ザビエルと共に来日し、イエズス会初代日本布教区長となったコスメ・デ・トルレス、畿内で活躍したグネッキ・ソルディ・オルガンティーノ、そして巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、日本人の資質を高く評価し、「適応主義」と後に言われる開明的な宣教方針をとった。これは、ヨーロッパにおけるキリスト教の習慣を絶対視することなく、自分たちが日本の文化に適応させることをいうが、これは、当時のヨーロッパ中心主義の意識の下に宣教地の文化を見下す傾向が強かった一般的なヨーロッパ人の概念を越える発想であった。

しかしイエズス会にも例外的な存在がいないわけではなかった。トルレスの後を継いで日本布教区の責任者となったポルトガル人の軍人出身であるフランシスコ・カブラルである。彼は基本的にアジア人である日本人を蔑視し、日本人がラテン語を習得したり、日本人を司祭にするための教育制度に反対の意を持っていた。そうした中、巡察師ヴァリニャーノが来日した。

ヴァリニャーノはカブラルの日本人蔑視の姿勢が布教の妨げとなっている事情を知る。激しい対立の末、1582年に彼を日本布教の責任者の地位から解任し、マニラへと去らせた。ヴァリニャーノにより、イエズス会の日本宣教に対する布教方針は、ザビエルから続いた日本人の性格を高く評価する基本姿勢に立ち戻らせたのである。ヴァリニャーノの来日当時、日本での布教区域は既に、南は鹿児島から、東は美濃や尾張に広がり、長崎、有馬、天草、豊後、山口、京都、高槻、堺、安土などでは、かなり大規模な信徒集団が形成されていたが、畿内と九州地方では、キリスト教改宗の進行状況に差が生じていた。³⁸ヴァリニャーノは来朝当時、既に京都での多数のキリシタン人口拡大に成功していたイタリア人宣教師であるオルガンティーノによる日本人観に大きく影響されていた事が書簡を通して伺う事ができる。1577年9月20日付のベルナルディーノ宛の書簡³⁹で、オルガンティーノは、「日本人は、世界でもっとも賢明な国民に属しており・・・我らの主なる神が何を人類に伝えたも

³⁸ 日本・キリシタン音楽教育の原点」久留米信愛女学院短期大学院研究紀要 第30号 p.27

³⁹ 松田毅一監訳『16・7世紀イエズス会日本報告集』第三部 5巻 同朋舎出版 1992年

うたかを見たいと思う者は、日本へ来さえすればよい。」と評価し、オルガンティーノによる日本人への大げさともとれる賞賛がなされている。ヴァリニャーノが受け取る日本人観は、オルガンティーノに強い影響を受けているので、彼は来朝する以前から日本人に対し好感を抱いていた。

しかし、九州を拠点にしていたカブラルはヴァリニャーノに反して、日本人嫌いであった。⁴⁰彼は日本人の神学生や同宿に対しても、冷たく日本人司祭の養成にも反対であった。そんな彼が相互理解を促進する語学習得などに力を入れるはずもなく、宣教師たちの会話が日本人に解されるようになることを嫌ってさえいた。ヴァリニャーノはカブラルが生じさせた問題をしずめるために、セミナリオを設置し、日本のキリシタン達に教育を授けることの重要性に重きをおいた。

2-2：ヴァリニャーノの教育構想

ヴァリニャーノは、来日の当初からすでに日本の教会を発展させるための壮大な全体計画を考えていた。彼は、日本の教会の将来を切り開くためには、まず教育事業から始めるべきであると考えていた。ヴァリニャーノは宣教師たちに、二つの大切な務めを委ねた。まず、宣教師たちは日本語を覚え、日本文化を身につけること。次に、全員が最も大事な務めとして、日本の教会を担うべき日本人司祭の育成に力を注ぐことである。

彼の計画の全体の目玉はセミナリオという教育施設であった。セミナリオはキリシタンの少年たちを教育する一種の西洋式学問所であるが、そこでは比較的身分の高い子どもたちが、日本社会が非キリスト教的環境の許であることを考慮し、徹底したキリスト教教育を施す為に完全な寮制度を採用していた。その中で、信仰生活、ラテン語と日本語、ポルトガル語、数学、そして美術⁴¹と音楽、体育を学んでいた。

1579年以前にも、1551年「未洗礼者基督教学校」などのように、「コレジョ」「セミナリオ」といった神学校とは言えないまでも、「教室」「寺子屋」と呼ぶべき小規模の教育施設は存在していたが、これらの施設は、各地域に滞在していた宣教師たちが、地域の子どもたちなどを集めて、自ら訳した教理書などを中心に説教しているにすぎず、各教室が統一のテキストを用いたり、会で定められたカリキュラムに

⁴⁰ 米井力也『キリシタンと翻訳—異文化接触の十字路』平凡社 2009年 p.46

⁴¹ 岡本良知『キリシタンの時代—その文化と貿易—』八木書店 p.61～66

従って運営されているわけではなく、⁴²今日の日本における学校教育のような体系的な教育形態とは程遠いものであった。

しかし、これらの事からも、イエズス会は、教徒獲得のために「子ども達の教育」に着目していたのは確かであろう。

1588 年度年報⁴³によると、イエズス会は、日本の子ども達を養成する理由について、一つにはイエズス会のため、さらには短期間のうちに聖職者になるべく、おびただしい数の働き手と化するに違いないことを確信している。というのも、日本の子どもは天性の才能に恵まれ、また、ラテン語の習得にも向いていると考えられており、そのほかのあらゆる学問においても真価を発揮するだろうし、徳を研鑽するについても非常に適した素質を有しているとイエズス会士達は考えていたからである。

彼らは、ラテン語と唱歌の学習の他に毎日数時間を日本語の読み書きの為に費やした。その事は彼らがラテン語の進歩をとげるのには少なからぬ障害だが、日本の文字と諸法律を十分知ることは大事なことであり、何より日本人とやってゆくために必要なことでもあるのでこの国で布教の成果を挙げようと企てる者はそれらの学習を欠かすわけにはいかなかったのである。

従来の日本にはなかった教育内容として、音楽教育と体育、演劇がある。中でも前述した音楽教育、キリスト教にとって音楽の教養を身に付ける事⁴⁴は、典礼に奉仕する信仰教化を進める上でも重要であるとされ、ラテン語のグレゴリオ聖歌と合唱の他、ヴィオラやギターなどの楽器も教えられていた。また、体育に関しては、夏は水泳訓練が行われ、週末には生徒全員が弁当持参でピクニックに出かけたりと、現代の遠足といえる行事も行っていた。演劇は、ラテン語の練習も兼ねられており、1592 年度の年報では「彼らは大いなる気品と威厳を持って演じ、多くの人（司祭）は涙を流すほどで、ヨーロッパでそれらの劇を見ている（司祭たちも）、この若者たちの演技という点ではヨーロッパ人たちに何ら遜色がないと判断するほどであっ

⁴² 宇野有介「日本におけるイエズス会神学校設立の経緯について—1580 年設立有馬セミナリヨを中心に」 p.169 シリング著 岡本良知訳 『日本に於ける耶蘇会の学校制度』東洋堂 1943 年

⁴³ 松田毅一監訳『16・7 世紀イエズス会日本報告集』第 I 部 1 巻 同盟出版 1992 年 p.16

⁴⁴ 片岡留美子『江戸時代 人づくり風土記 42 長崎』農文協 1989 年 p.178

た。」⁴⁵と報告しており、その他でも、今日でいうところの「宗教学」の授業、すなわち仏教をはじめとする日本の宗教についての知識教育（宗教批判）⁴⁶もなされていた。

ヴァリニャーノが目指したのは、ヨーロッパ的教育の良い所を取り入れても日本的なものを失うことなく、両者を調和して伸ばしていくことであったから、建物や生活様式は日本風⁴⁷で、日本人としての人間教育を大切にした。調和した東西文化をもって、世界に通じる日本人を育てようとした集大成が天正少年使節団であり、彼らのヨーロッパにおける社交性や理解力、観察態度は、セミナリオの教育制度の素晴らしさを証明したといえよう。また、ヴァリニャーノにとって、ヨーロッパ人たちが日本語を学べるようにすることも重要であり、その為に、日本文典と日葡辞典の作製を企画し、欧語の文献が次々と日本語に翻訳され、ヨーロッパ人宣教師の語学力も向上させた。⁴⁸ 日本の教会を担うべき日本人司祭の育成のため、宣教師、そして日本人の言語習得、洋画教育、音楽教育、そして日本の文化を尊重し、おこなった適応主義はこのような経緯で行われていったのである。

2-3：ヴァリニャーノが指示した日本のイエズス会学校の建築様式

1579年日本へ来日した巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、1582年まで滞在して布教状況を視察、当時の日本の状況やイエズス会の布教状況を確認し、布教組織を改善、教育改革にも力を入れていくのであるが、高等教育機関も、将来の信者激増を予測し、それに対応すべき布教者を養成するために彼が設立させたものであるが、彼はこれらの学校を開いた翌年に近畿地方を旅行している。そして京都から安土へ行く際に安土のセミナリオのある教館に滞在し、織田信長にも謁見⁴⁹しているのであるが、1582年日本を去り、インドへ帰る途中に、日本の布教実状と安土の学校に就いてを「日本管区所属事情の要項」⁵⁰に記しており、それにより日本

⁴⁵ 松田毅一 監訳『一六・七世紀 イエズス会日本報告集』第Ⅰ期 1巻 同朋舎出版 1987年 p.307

⁴⁶ 米井力也『キリシタンと翻訳—異文化接触の十字路』平凡社 2009年 p.53

⁴⁷ 岡本良知『キリシタンの時代—その文化と貿易—』八木書店 p.13

⁴⁸ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.300

⁴⁹ ルイス・フロイス著 岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店 1991年 p.4

⁵⁰ 岡本良知『キリシタンの時代—その文化と貿易—』八木書店 p.8

の習慣に従った建築方を採用しなければ彼らの礼儀などの動作ができなくなることを、これから建築されるいずれの教官でも、まず、日本人工匠と相談し、その設計に従うように配慮する事を指示していた。また、この安土のセミナリオについては、1583年に書かれた「日本巡察記」の中に次のような記述がある。「我等は同所に優雅な若干の修院を建築した。それは日本風に、周囲に廊下のある部屋 20 室と、階下に同数の寢室を有し、それら全ての上の三階には大広間があつて、現在は神学校としてこの建築全体が使用されており、貴族の子弟 30 名が居住している。⁵¹」と、30 人の上流階級の少年が滞在しているセミナリオの部屋の様子が記述されている。また、ヴァリニャーノが近畿地方を巡察した時に、これに随行していた一人が宣教師ルイス・フロイスであるが、彼も安土の教館とセミナリオに関して「日本史」において、日本の慣習に従って自由に動く戸をはめてあつた事。身分のある客をあげて接待しようとする時はいつでも 3, 4 の室を一つの大広間に直す事ができたことが記されており、この事から、日本風の三階建てで縁側があり、セミナリオにはその三階の大きな広間が充てられた事がわかる。ヴァリニャーノの著した「日本の風俗とカタンギに関する注意と警告」と題する書を訳したヨゼフ・シュッテによる「16 世紀日本布教における適応の方法に関する最も重要な資料」⁵²においても、日本人慣用の建築法を採用しないと、彼らの間に行われる礼儀と動作などに支障をきたすし、彼らの建築がヨーロッパで慣用するものとは異なり接待の仕方も異なる事から、先ず日本人工匠と相談し、その設計に従う必要性が記されている。

当時のイエズス会の建築物が、日本人の習慣に基づき、日本人の立ち居振る舞いに適するように、つまり日本風であることが重要であり、設計も日本人の職人に委ねる事、また、規模の大小や、コレジオ、セミナリオ、修練所といった設備などはその目的に従って異なって建築されていたことがわかる。また、ヴァリニャーノは、天主堂（礼拝堂）だけは日本風の構造を採る事を禁止している。聖堂らしく奥行き

⁵¹ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973 年、石橋弘子「キリシタン時代の青少年教育についての一考察 天草のセミナリオ、コレジオの目録を中心に」

⁵² 岡本良知『キリシタンの時代—その文化と貿易—』八木書店 p.13 Alessandro Valignano, *Il cerimoniale per I missionary del Giappone. Edizione critica, introduzione e note*, Giuseppe Fr. Schutte. Roma 1946 ヨゼフ・フランツ・シュッテ著 加藤知弘訳『ヴァリニャーノの日本布教の諸原則』大分県芸術文化短期大学研究紀要 第 34 巻 1996 年

を深くし、内部正面の祭壇をはじめとして、すべてカトリック教の伝統を崩さないようにと厳命している。⁵³ ヴァリニャーノが聖堂をヨーロッパ風にこだわった理由としては、彼らヨーロッパ人が日本の寺院（各宗教）が悪魔の殿堂であり、キリスト教の会堂は神のそれであるとの考えからから、キリスト教の形式において日本の寺院を真似る事を許さなかったのではないか。

2-4：教育の対象と教育方法

では、イエズス会士たちが布教事業を維持し、好都合に発展するために選んだ教育の対象者は、どのような者達であったのだろうか。そこでは、「少年の為の学校以外の教育は行われなし、学院の諸規則をことごとく遵守させることはできないが、修道院生活と我々の立派な生活態度（を守らせるように）配慮しなければならぬ。⁵⁴」

「これらの修院は、住民の全てがキリスト教徒である諸領地に設立されるべきである。これらの修院の各々には、少年の学校を設け、これら児童には、日本語の読み書きを教授し、時期がくれば我等の書籍が読めるように、ラテン語の読み書きを教育する。⁵⁵」ことから、少年のみを対象としていたことがわかる。

また、神学校の設立の時に際しては、「ここでは百名の日本人が教育をうけるが、彼らは一般には、地位の高い貴族（の出身）である。—その三分の二は、10歳～17歳ないし18歳までの少年とし、三分の一は大人である。この後者は、前記の年齢に達した前者の中から選抜した者である。彼らには、その統制、規則に従って、道徳や文字を教え、成人となったあとに、ある者はイエズス会に入会してその援助を行い、ある者は在俗聖職者になるか、あるいは我等の修院、その他の教会で他の仕事に就任するようにする。」⁵⁶ことから、身分の高い少年たちを教育の対象としており、少年から青年にかける年頃の男子に優れた教育を施し、その後イエズス会の支えになるように力を入れていた事がわかる。日本の領主や、武士、貴人の子弟を教育する事が適切だと考え⁵⁷が出て以降、日本のキリスト教徒の領主や武士が当時抱

⁵³ ヨゼフ・フランツ・シュッテ著 加藤知弘訳 『ヴァリニャーノの日本布教の諸原則』大分県芸術文化短期大学研究紀要 第34巻 1996年

⁵⁴ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.66

⁵⁵ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.66

⁵⁶ 同上アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.69

⁵⁷ 同上アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.79

いていた不安、すなわち、上記の子どもを教育する機関がないという事を除去できたはずである。以前、彼らの自領に仏僧がいた頃は、教育のために子ども達はある期間、仏僧たちの寺院に預けられており、これは、異教徒（キリスト教以外）の身分の高い者の間では広く行われた慣習であった。そして、天正少年使節⁵⁸に選ばれた四名の年齢も、14～16 歳くらいであると推定されていることから、「教育」の対象者は、十代前半の者、現在でいえば中学生、高校生を養成する事が、宣教師たちにとっては望ましいことであり、そのためにも、幼い頃からの語学教育に力を入れ、後に学ぶ他の教育を受けるために役立てるためにも重要視していたのは確かであるといえよう。

次に、日本とヨーロッパの時間の概念について考えていきたい。日本とヨーロッパでは時間について何か異なった基準があったのであろうか。神学校の時間割は、何が基準となっているのであろうか。日本の文化に適應する為、日本にあわせたのか。どうやらそうではないようである。

16 世紀のヨーロッパでは、時間は厳しく管理されていた。王の地位にあるものから、市民層にいたるまで、どの階層も修道院と同様、禁欲的な時間割に縛られていた。⁵⁹ヨーロッパでの教育の時間は、以下のように管理されていた。

「四時に起床し、五時には全ての学生がそろって教場の床に座っていなければならなかった。最初の授業は一時間で、そのあとはミサだった。それから休憩と食事になり、8時から10時まで、二時限目の授業。10時から11時までは討論時間だった。食事後、12時には、再び授業が始まる。13時は公開講義。3時から5時までは3限目の授業。5時、討論、6時、夕食。7時に一日の勉強の総括を行い、8時ないし9時には就寝（季節による）」⁶⁰キリスト教をもたらした宣教師たちは、このような時間の管理を、ほぼそのまま日本に持ってきていた。

16 世紀の後半、ヴァリニャーノは、ザビエルの来日以降約 30 年の布教活動を総括したうえで、新たな改革に着手する。それは前節した学校建設であり、学校教育であるが、日本人の中から聖職者や在俗の指導者を養成する為の教育機関、すなわ

⁵⁸ 結城了悟『新史料 天正少年使節 キリシタン研究第二九輯』p.34 : ドン・マンシヨ 15 歳、ドン・ミゲル、ドン・マルティノ 14 歳、ドン・ジュリアン 16 歳

⁵⁹ 米井力也『キリシタンの文学』平凡社 1998 年 p.18

⁶⁰ ジャック・アタリ著 蔵持不三也訳『時間の歴史』

ち、セミナリオ、ノビシアド、コレジオであるが、それらのキリシタンの学校ではヨーロッパと同じような時間が採用されていたのである。

ヴァリニャーノが記した『日本巡察記』の「神学校内規」で当時の日本の時間割について知ることができる。「一、夏季：四時半起床、司祭達と共に祈り、五時ごろに終える。（一以下省略）日曜日と祝日には、食事の後、別荘に逝って休養するか自由にする。雨が降ったり、非常に寒かったり、外出できない時には、一日中、屋内で休養する。しかし音楽をするものは、しばらく唱歌や楽器の演奏に時間をあてる。」⁶¹から、日本もヨーロッパも朝4時に起床し、その後にミサ、そして勉学という同様の流れを追っていることがわかる。

宣教師であるルイス・フロイスは、「われらは昼と夜のあいだを二十四時間とする。日本人には夜が六時間、昼が六時間あるだけである。」⁶²「われらは時を一、二、三から十二まで数える。日本人は次のように数える。すなわち、六、五、四、九、八、七、六などと」⁶³記しており、時間の数え方も日本とヨーロッパでは異なっていたことがわかる。

では、なぜ適応主義を布教方法に取り入れたイエズス会は、自分達の‘時間’という概念を持ち込んだのだろうか。どうやら、彼ら宣教師がヨーロッパの時間を持ちこんだのは、神学校のカリキュラムを遂行し、また、一日24時間とする感覚だけではないようである。なぜなら、キリスト教にとって暦というものは、非常に重要だと考えられていたからである。安息日や公言祭、生誕説、聖霊降臨説、イエス・キリストの復活において暦というものはとても重要であったし、「江戸幕府による過酷な迫害のもとで、潜伏キリシタンが独自の暦を秘匿していたのは、それが彼らの日常にまで及ぶ時間意識の基礎だからである。⁶⁴」ということからも、日本の風習にあわすことを重視していた方針を採用していたイエズス会士達が、時間については譲らなかった事からも、キリスト教にとってヨーロッパの時間、つまり暦を持つてくることは非常に重要な事であったのではないだろうか。

⁶¹ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.330

⁶² E・ヨリッセン著 松田毅一訳『フロイスの日本覚書』中央公論社 1983年

⁶³ E・ヨリッセン著 松田毅一訳『フロイスの日本覚書』中央公論社 1983年

⁶⁴ 米井力也『キリシタンの文学』平凡社 1998年 p.21

3：ヴァリニャーノの見た東インド

ヴァリニャーノは日本に来る前、東インドの巡察師として、東インドでの布教活動もしいた。しかし、その成果は彼の中では、あまり良いものとは、考えられなかったようである。彼は東インドではどのような教育構想を用い、それがどのように日本と異なったのかを、彼が残した『東インド巡察記⁶⁵』から知る事が出来た。まず東インドの人種や王国、習慣および言語の多様性について、彼は、「(東インド)管区内ですら、人種、王国、特色、習慣、言語には著しい相違がみられる。人々はいくつかの点では互いに似通っているものの、多くの点で相違があり、ある事柄で間全く相反している。これは、彼らがヨーロッパ人と相反しているのと同じである。⁶⁶」ということから、管区内ですら言語や習慣の違い、人種の違いがあった事が記されており、また、日本とシナを例外とし、「人々は皆、黄褐色の肌をしているが、ある人々は、暮らしている土地の暑さや家系、それに生業の特色に応じて、他の人々よりも色が黒い。これに従うと、ある人々は別の人々よりも優れていなかったり、有能であったりなかったりする。しかし、一般にこの人々は、あまり優れてもいないし有能でもない。したがって、アリストテレスが述べているように、この人々は先天的に(他人に)奉仕すべく生まれてきたのであろう。しかし、中には博識なものもいる。自分の利害のこととなると、とりわけ鋭い理解力を示す者もいる。⁶⁷」ここでは、まず見た目に関してのアジア人の特色や感想が書かれており、国民性においても、バラバラであり、一般には有能でなく、あまり優れていないと日本においての日本人についての報告と違い、インドの原住民に対する評価は否定的であると言えるであろう。

また、彼の東インドに対するこの否定的評価は『東インドに於けるイエズス会の

⁶⁵『東インド巡察記』は、イエズス会宣教師のアレッサンドロ・ヴァリニャーノが巡察師として、イエズス会インド管区の擁する主要布教地の政情や風俗、文化および布教上の諸問題を「公式巡察報告書」としてまとめあげたものであるが、細かい日付などの判断が困難となっている。ヴァリニャーノはこの報告書を1577年から着手し、これは全文イタリア語で書かれているが、書名がなく、ヴァリニャーノがインド管区滞在中に見出した事柄を総会長に報告するために執筆されたものと考えられる。彼の滞在歴などからも1577～1580年の期間中に書きあげられたものであることが言える。

⁶⁶ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』平凡社2005年 p.36

⁶⁷ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』平凡社2005年 p.36

歴史 1542年—64年』の第四章の中にも見られる。⁶⁸ 上記で記されているアリストテレスにおいては、おそらく『政治学⁶⁹』に見られる「本性的奴隷説」や「自然に基づく奴隷説」のことをさしており、この地の人々の事を奴隷ともみなしているような意図を伺う事ができる。「人々は一人残らず無知で、いかなる種類の人文諸学も自然科学も知らない。すべての人種に共通しているのは、自分達の言語での読み書きができることである。⁷⁰」この事から、東インドの人々は無知で、言語の読み書き以外の学問を習得してはおらず、「人々は皆、甚だしく悪習に染まった不道德な輩で、大変な虚言癖である。彼らは邪悪な生活をしているので、著しく良心を荒廃させてしまっている。そのため、理性の光も良心の呵責も、すっかり失っているようである。⁷¹」の中にある悪習、邪悪な生活というのは、この地の人々のほとんどが異教徒とイスラム教徒であったことだと思われる。

いずれにしても、その後ヴァリニャーノが日本に來日し、日本人について観察した報告と比較してみると、インド人の報告に反して賞賛をあげていることが理解できるであろう。彼は、『日本巡察記』において、日本人がヨーロッパ人と同等、そして一部の部分では、我等（礼儀や勤勉さのこと）より優れていることを記している。⁷² 彼らはインド人にはじまり、日本人以外の諸民族は奴隷的であり、日本人は自分達と同等であるという印象を残しているのは、非常に興味深く、日本への布教が支配目的でなかった点においても関係していると考ええる事ができる。

3-1：ゴアのサン・パウロ・コレジオ

日本のコレジオの建築様式は、適応主義にのっとり、日本の文化が取り入れられていた。ではインドにおいてのコレジオの建築様式はどのようなものであったのだ

⁶⁸ 「一般的に、この人達（大体、黒褐色の肌をしており、半裸でいる）は低く評価され、ポルトガル人や他のヨーロッパ人から信用できないと考えられている……この人達はアリストテレスが語るところの、奉仕するためにつくられた種類の人々のようである。それは彼らがおしなべて貧しく、みじめで窮迫しており、利益とあらば多くの卑賤なことを行うからである……一般にこの地方の人民は粗野であり、学問が全く欠けている為に理解力に極めて乏しい」『キリシタン研究』岩谷十二朗邦訳 二十七輯 p.190～194

⁶⁹ アリストテレス著 牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版会 2001年

⁷⁰ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳『東インド巡察記』平凡社 2005年 p.38

⁷¹ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳『東インド巡察記』平凡社 2005年 p.38

⁷² アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社 1973年 p.5

ろうか。サン・パウロ・コレジオは「実に豪華絢爛で立派に設計され、全体が石と石灰から作られている。大きな回廊が二つあり、一方が他方の上になっている。小回廊も二つで、部屋が50室もある。最上階にはとても快適な医務室がある。⁷³」「必要な事務室も使いやすく、二階の回廊の突き当たりには、修練死の為の非常に快適で広い部屋がある。その部屋の上には修練死が25人は入れる広間があり、彼らはそこで自分達の時間を送り、全員が一緒に食卓につく。この広間の近くには教師用の部屋と「霊操」を行う部屋がある。医務室は階段で（階下と）つながり、当コレジオの病舎として役に立っている。前述した広間の下には、食堂の備わった広い礼拝堂のほか、必要な事務室がいくつかある。・・・それらの一つは、このコレジオの共同調理場として役に立っている⁷⁴」とあるように、収容人数や回廊、事務室、調理室などからかなり大規模なコレジオであったことを伺う事ができるが、これといってインドの様式を用いていない。また、この「コレジオの修学生は自分達の菜園を持っている。その突き当たりには、もう一つ、児童用のコレジオがあり、ポルトガル人の男児が30人ほどいるが、その大半が孤児である。そして、これとは別の6、70人の児童は原住民であった。⁷⁵」事から、ヨーロッパの宣教師達はヨーロッパの孤児を東インドにまで連れて行き、コレジオに入れていた事がわかる。また、原住民の子ども達とポルトガル人の孤児を分けているが、これについての理由は記されていない。しかし、読み書きの授業を考えた時に、分ける方が効率が良いのは明らかなので、その点も踏まえられてのことであつたのであろう。修学生たちは別個に自分用の寝室と食堂をもち、また、このコレジオとは別個の礼拝堂、調理場、仕事場ももっていた事からも非常に大きなコレジオであつたことがわかる。

東インドの神学校ではどのような事を学んでいたのだろうか。『東インド巡察記』によると「次の六課程が開講されている。すなわち、二課程は哲学と神学で、良心問題の講義も行われている。三課程は文法と人文学、六つ目は非常に重要な課程であり、約700人にも達する児童のためのものであるこの過程は教師2名が担当し、

⁷³ サン・パウロ・コレジオの内部構造に関する記述で、「最上階」という語も見られるが、これらの病舎だけでは、コレジオが何階建てのものであるのかを知ることは困難であつた。しかし、収容人数や回廊、事務室、調理室などからかなり大規模なコレジオであつたことを伺う事ができる。

⁷⁴ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005年 p.54

⁷⁵ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005年 p.54

児童に読み書きと計算を教えている。ゴアには以上の課程で十分である。・・・ゴアの土地柄は、学問に向いていないからである。⁷⁶⁾ともあるように、六課程を紹介する数字と内容に整合性が見られないが、哲学、神学、良心問題、文法、人文学、児童用の各課程で都合上、六課程となっているのであろうが、この事からも、子ども達の教育は、言葉の読み書きのみで、日本の子どもに施している教育（つまり読み書き、ラテン語、音楽、美術、演劇、算術、体育など）にくらべ、著しく少なく、また、ゴアの児童にはそれで十分という評価を下していることがわかる。東インドでの反省を踏まえ、日本において、コレジオやセナリオ、そして適応主義という手法を用い教育構想を展開したヴァリニャーノであるが、この時はまだそのような発想には至っていないようである。もしくは、ヴァリニャーノがヨーロッパの植民地である東インドの人々を支配的な立場から、‘奴隷的’とみていることから、イエズス会の司祭として、布教の支えとして高等教育を教えるという考えも持っていなかった事は、可能性としては十分に考えられる事である。

また、「(インドの)イエズス会は、ヨーロッパの他のコレジオに習わしとなっている様々な聖務を、このコレジオでも行っている。教会にはいつも非常に大勢の人々が集まり、毎週日曜日と祝祭日には、グレゴリア聖歌の交唱によるミサがあげられ、説教が行われている。・・・我々がコレジオに擁している児童達が歌い手を務める⁷⁷⁾」ことから、楽器は教えられていなくても、歌は教えられていたこと、そしてそれを日曜日や祝祭の日に披露していたことが伺える。また、これにおいては、ポルトガル人の児童が歌い手として重宝されていた⁷⁸⁾という記述もあるので、ポルトガル人の子ども達の教育水準は原住民の子どもに比べ、高かったということもできるであろう。

3-2：ヴァリニャーノがみた東インドの様々なコレジオにおける児童たちと教育内容

東インドで最も重要視されていたゴアのサン・パウロ・コレジオの様子については理解できたが、では、他の、小規模なコレジオはいったいどのような教育システム、ないし、子どもたちは生活していたのであろうか。ここでは様々なコレジオか

⁷⁶⁾ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005 年 p.55

⁷⁷⁾ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005 年 p.56-7

⁷⁸⁾ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005 年 p.91

らヴァリニャーノの報告を参考に東インドの子ども達の教育内容や様子を考察していく。サルセッテにある原住民児童用の学校は、ポルトガル語と、彼らの言語（カナリン語）での読み書きが教えられていた。この学校の隣には、この学校の児童用の家屋があり、30人の児童が起居を共にしている。児童達は大概孤児であり、当コレジオの費用で生活している。とあり、ここでも主に読み書きのみを教えられており、また、ここでは多くが原住民の孤児であったことがわかる。また、「イエズス会はインド布教の当初から、原住民児童を将来の司祭とすることを目的に、外部との接触を避け、一施設に原住民児童を収容し、教理教育やラテン語、ポルトガル語などを教え、早くからキリスト教的環境と雰囲気の中で育成しようとしていた⁷⁹⁾」と『東インド巡察記』の訳者でもある高橋氏の見解からも、子どもを教育し、司祭とする構想は、東インドでの布教時には既にもっていた構想であると考えることができる。

次に、バサインのコレジオについての記述がある。バサインはポルトガル人が80人ほど住んでいる都市である。このコレジオには二つの学校があった。「その一つは文法の学校で、他の一つは児童達に読み書きと計算を教える学校である。学校はこれ以上不要である。・・・児童達はどの子も学ぶ意欲がなく、両親も我が子が学ぶのを望んでいない。その理由は、後に述べるように、インド全域の人々は勉学や学問に対して、ほとんど関心がないからである。⁸⁰⁾」この記述からは、ゴヤと同様、主に読み書きと算術しか教わっていないこと、また、原住民の向学心の低さが伺える。また、ゴアの南部にあるコチンは、ポルトガル国王陛下がインドに所有しているゴアに次いで重要な都市であるが、このコレジオでも、文法の課程が二つ、読み書きの課程が一つ置かれている。文法の課程には50人ほどの学生が、読み書きの課程には30人以上の児童がおり、また、年長の修学生がいる場合には良心問題も講義されている。しかし、ヴァリニャーノは、コチンでは以上の学問で十分であるとも記述していることから、やはり、それ以外の科目は教えることは不可能に近かったのであろう。「原住民児童は（そのセミナリオで）学んで教区司祭となるからである。児童達の世話は我がイエズス会員達が行う、我々の信仰と宗教に関する十分な教育と

⁷⁹⁾ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005年 p.86

⁸⁰⁾ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005年 p.91

善き習慣のほかに、児童たちには、いずれラテン語と良心問題を教えねばならない⁸¹⁾とし、その目的がその都市の原住民教区司祭たちが、布教団の許でイエズス会員から援助を受ける事により、カースト制に属している異教徒を改宗させるためにも必要なものだとしている⁸²⁾事から、確かに、訳者でもある高橋氏の言うように原住民司祭をつくる教育をしようとしていたことが布教の面においても伺う事ができる。

4：終りに

本論文では、1560～1590年代に主に活躍した宣教師が見た日本の子どもについての報告をもとに、ヨーロッパの宣教が異文化である日本と接触した際の具体的な問題点を明らかにすることを試みた。日本に初めてキリスト教やヨーロッパの文化を伝えたポルトガル人宣教師であるフランシスコ・ザビエルは、「私たちが交際することによって知り得た限りでは、この国の人々は今までに発見された国民の中で最高であり、日本人より優れている人々は、異教徒の間では見つけられないでしょう⁸³⁾」と日本を絶賛しており、自分達西洋人と同等の民族として日本人のことを見ていた節があり、一部においては、我ら西洋人よりも優れていると、日本人に対してかなりの高評価を報告していた。そんな中ルイス・フロイスは、日本語や土地の風習を学び、『ヨーロッパ文化と日本文化』の日本の子どもに関する章で、多くのヨーロッパの子どもたちとの違いを報告している。そしてフロイスの『日本史』において、ヨーロッパの宣教師が日本語を習得することの必要性から、日本語やポルトガルの文法書を制作していたことや、またルイス・フロイスは宣教師が日本の宗旨を学ぶ必要性を報告する中で、僧侶や仏教徒と議論し、信仰内容を論破する必要があり、それができなければ、日本人を改宗することはできないとの考えを示していた。彼自身も日本の文法書を制作し大きな功績をのこしたフェルナンデス修道士に日本語を学んでいたし、何よりイエズス会が布教活動のため「子どもへの教育」に着目していたことから、言語習得はイエズス会宣教師にとっても日本のキリタン学校に通う子どもたちにとっても重要なものであった。異なる文化が接触するとき、両者

⁸¹⁾ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005年 p.113

⁸²⁾ アレッサンドロ・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』 平凡社 2005年 p.113

⁸³⁾ 山内和『青い目に映った日本人』人文書院 1998年 p.25

の差異は言語にあらわれる。その問題を解決するためにも宣教師と日本のクリシタン両者の語学習得は必須であったし、後のヴァリニャーノも日本の国民の優秀性を示したうえで、より日本人にキリスト教を理解させ、司祭として養育する為にも、この言語習得はイエズス会の教育システムの中でもとても重要な位置を占めていたことがわかった。また、イエズス会は洋画教育にも着手しており、セミナリオにおける日本の生徒の技術力の高さを賞賛しており、教会のために大いに役立つことを報告していたことから、イエズス会宣教師たちにとって非常に心強い技術となり、その技術獲得のために洋画教育を重要視していたことは間違いないであろうし、賞賛しているフロイス自身がそれを自身の教育構想にも入れていたことは十分考えられることであった。音楽教育に関しても、西洋人と日本人の間には激しい音楽感の違いが見受けられたが、キリスト教にとって宗教音楽はとても大事であったために、とても積極的に教育に取り入れていたことなども、時間割などで知ることができた。ヴァリニャーノは、自身の報告の中で、日本の子どもたちの理解力の高さを賞賛しており、このことは、布教を行う彼ら自身にとっても非常に好しいことであった。また、日本がヨーロッパと、すべてにおいて正反対なことを理解したうえで、日本の文化を尊重することを非常に重要視した政策をとった。これがいわゆる「適応主義」とよばれるものであり、イエズス会の学校建設により、その成果が発揮されていた。

これは、ヨーロッパにおけるキリスト教の習慣を絶対視することなく、自分たちが日本の文化に適応させることであった。

ヴァリニャーノは、日本において、外国が支配していく基礎をつくれるような国家ではなく、教育を施した後は、手をひくべきであると考えていたことから、日本に対して布教を支配的な観点から利用していなかったのは確かであろう。しかし一方では、ポルトガルの植民地であった東インドでの布教において、インドにおける国民性を奴隸的とし、建築様式や、教育科目に関しても日本とは異なり、インドの様式を採用した形跡はなく、音楽教育や洋画教育は行われていなかったようである。語学教育は東インドにおいても行われていたし、それは東インドの人々を司祭として養成するためのものであったとしつつも、インドにおける教育はそれのみで十分であると、積極的な教育姿勢とはいえないものであった。このことから、ヴァリニャーノないしイエズス会にとって植民地である東インドと日本においては、

意図的に区別し、教育を施していたと考える。東インドでの布教活動の後、日本に来たヴァリニャーノにおいて、音楽教育や、洋画教育、その土地の文化にあった建築様式を用いるなどといった違いはインドにおける反省をしたうえでの改善ではなく、あくまでも日本というヨーロッパ人の想像をはるかに超えた国でキリスト教を布教するために計画された構想であったのであろう。

参考文献

1：フロイスとヴァリニャーノの著作

Luis Frois, Lettera del Giappone degli anni 1591. et 1592 Roma 1595.

ルイス・フロイス著 アンリー・ベルナール、アブランシェス・ピント、岡本良知
編纂『九州三侯遣欧使節行記』東洋堂 1949年

ルイス・フロイス著 柳谷武夫訳 『日本史 (5) キリシタン伝来のころ』東洋文庫
1978年

ルイス・フロイス著 松田毅一訳 『日本史 (6)』中央公論新社 2000年

A・ヴァリニャーノ著 家入敏光訳『日本のカテキズモ』天理図書館 1969年

A・ヴァリニャーノ著 清水有子訳『研究キリシタン学 (3)』1598年10月16日付
け、長崎発、総会長宛書簡 2000年

A・ヴァリニャーノ著 高橋裕史訳『東インド巡察記』平凡社 2005年

A・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳 『日本巡察記』平凡社 1973年

清水有子訳「〈史料紹介〉A・ヴァリニャーノ、1598年10月16日付、長崎発、総
会長宛書簡」『研究キリシタン学 (3)』東京：キリシタン学研究会 2000年

清水有子訳『研究キリシタン学 (6)』ヴァリニャーノの書簡 (2) 2003年

A・ヴァリニャーノ著 矢沢利彦訳 『日本イエズス会士礼法指針』キリシタン文
化研究会 1970年

2：研究書、学術論文

青野壽朗・尾留川正平責任編集『日本地誌 20』二宮書店 1976年

ジャック・アタリ著 蔵持不三也訳『時間の歴史』原書房 1986年

阿部隆夫「ルイス・フロイスの日本宣教記」地域研究所年報 23号 2000年

- 天野知恵子『子どもと学校の世紀—18世紀フランスの社会文化史』 岩波書店
2007年
- フィリップ・アリエス著 中内敏夫・森田伸子編訳『「教育」の誕生』 藤原書店
1992年
- フィリップ・アリエス著 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』 みすず書房
1980年
- アリストテレス著 牛田徳子訳『政治学』 京都大学学術出版会 2001年
- 安野眞幸『教会領長崎—イエズス会と日本』 講談社選書メチエ 2014年
- 池田敏雄『人物中心の日本カトリック史』 サンパウロ 1998年
- 石川博樹「17世紀エチオピアにおけるイエズス会の布教失敗」 史学雑誌 108 (12)
公益財団法人史学会 1999年
- 石川博樹「17世紀前半ソロモン朝のベフト・ワッタド—イエズス会のエチオピア布
教失敗の一要因—」『オリエント』 43 (2) 2001年
- 石川博樹「スペイン王立歴史アカデミー付属図書館所蔵イエズス会北部エチオピア
布教関係文書」『オリエント』 50 (2) 2007年
- 宇野有介「日本におけるイエズス会神学校設立の経緯について—1580年度設立有馬
セミナリヨを中心に—」『二松大学院紀要 (20)』 2006年
- 宇野有介「1565～66年におけるイエズス会宣教師の活動について—仏教との対立と
日本語の学習状況を中心に—」『二松学舎大学人文論輯 (77)』 二松学舎大学
2006年
- ヴィットリオ・ヴォルピ著 原田和夫訳『巡察師ヴァリニャーノと日本』 一藝社
2008年
- 海老沢有道『季刊 日本思想史 (6)』「キリスト教と日本宗教との交渉総説」 ペリカ
ン社 1978年
- H・チースリク『季刊 日本思想史 (6)』「東西思想の出会いに関する一史料—ルイ
ス・フロイスの教理説教ノートより」 ペリカン社 1978年
- 大石学『江戸の教育力—近代日本の知的基盤—』 東京学芸大学出版会 2007年
- 岡美穂子『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』 東京大学出版会 2010年
- 岡田章雄著作集Ⅰ『キリシタン信仰と習俗』 思文閣出版 1983年
- 『外から見た日本』 岡田章雄著作集Ⅳ 同朋社 1983年

- 岡田章雄『キリシタン大名』 教育社 1977 年
- 岡本良知『キリシタンの時代—その文化と貿易』 八木書店 1987 年
- 小笠原正仁「戦国末期の寺内町の諸問題—ルイス・フロイスの『日本史』を中心として—」 『関法 第 39 卷 (3)』
- 小野貴史「ルイス・フロイスの記述における中世日本の音楽観」『信州大学教育学部紀要 (115)』 2005 年
- 尾原悟「ルイス・フロイス考」『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究 27 (4)』 上智大学 1979 年
- 鹿毛敏夫「大友宗麟—アジアン大名家から生まれたキリシタン大名」海路 (8)『九州とキリシタン=キリスト教の到来』 2009 年
- 亀井孝、H・チーリスク、小島幸枝『日本イエズス会版 キリシタン要理—その翻案および翻訳の実態—』 岩波書店 1983 年
- 片岡弥吉『長崎の殉教者』 角川選書 1970 年
- 片岡留美子『江戸時代 人づくり風土記 42—長崎』 農文協 1989 年
- ヨゼフ・フランツ・シュッテ著 加藤知弘訳『ヴァリニャーノの日本布教の諸原則』 大分県芸術文化短期大学研究紀要 第 34 卷 1996 年
- 川崎桃太「ルイス・フロイスと一六世紀の日本」『Mare Nostrum (9)』 1997 年
- 川崎桃太『フロイスのみた戦国日本』 中公文庫 2006 年
- 川村信三「『キリシタンの世紀の再検討』—世界史的視点・および日本側視点でみたイエズス会宣教—」上智大学 2006 年
- 神田千里『東洋大学文学部紀要 第 62 集 史学科編 第 34 号』「ルイス・フロイスの見た戦国期日本の宗教の特質」東洋大学 2008 年
- 神田千里『宗教で読む戦国時代』講談社選書メチエ 2010 年
- 岸野久訳 高瀬弘一郎訳・注『イエズス会と日本 (2)』 岩波書店 1988 年
- 岸野久『ザビエルと日本—キリシタン開教期の研究—』吉川弘文館 1998 年
- 木村武史「北米植民地時代のコンタクト・ゾーンにおける「ビーヴァーの骨」と「笑い」をめぐる先住民とイエズス会士」筑波大学地域研究 (21) 2003 年
- 木村岳士「再考 第十三代 有馬晴信」『特集 九州とキリシタンキリスト教の到来』 2009 年
- 久留島典子『日本の歴史 (13) —揆と戦国大名』講談社 2001 年

- 桑原直巳「キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育」『哲学・思想論集第34号』2008年
- 五野井隆史「横瀬浦の開港と焼亡について」『聖トマス大学創立50周年記念号』2013年
- 五野井隆史「ヴェトナムとキリスト教と日本—16・17世紀コーチシナにおけるキリスト教宣教を中心に—」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報(16)』青山学院女子短期大学総合文化研究所 2008年
- 米井力也『キリシタンの文学』 平凡社 1998年
- 米井力也『キリシタンと翻訳—異文化接触の十字路』 平凡社 2009年
- 重松伸司「16-18世紀の南インドに関するイエズス会史料—フランス版イエズス会文書を中心に」名古屋大学文学部三十周年記念論集 1979年
- 進藤務子「日本・キリシタン音楽教育の原点—南蛮文化との出会い；イエズス会士A・ヴァリニャーノによるミッション教育の軌跡の探訪」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 (30)』 2007年
- ジェフリー・バラクラフ編 別宮貞徳訳 上智大学中世思想研究所監修『図説 キリスト教文化史 (I)』原書房 1993年
- 柳谷武夫『キリシタン研究 第十一輯』 吉川弘文館 1966年
- Josef Wicki S.J. 柳谷武夫訳『キリシタン研究 第十六輯』「ばあでれルイス・フロイスの『日本史』1549—1594年」 吉川弘文館 1976年
- キリシタン文化研究会編『キリシタン研究 第十六輯』「キリシタン音楽」吉川弘文館 1976年
- ヨゼフ・フランツ・シュッテ著 部分訳加藤知弘『ヴァリニャーノの日本布教の諸原則』大分県芸術文化短期大学研究紀要 第34巻 1996年
- 高瀬弘一郎「キリシタン時代マカオにおける日本イエズス会の教育機関について」『キリスト教史学第53集』キリスト教史学会 1999年
- 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』 八木書店 2001年
- 高瀬弘一郎『キリシタン時代の貿易と外交』 八木書店 2002年
- 高瀬弘一郎、日埜博司訳 「A Igreja Crista (Kirishitan) no Japao e os Poderes Unificadores Japoneses nos Seculos XVI XVII—キリシタンと統一権力（承前）」流通経済大学論集 (41) 2 流通経済大学 2006年

- 高橋勝幸「ペドロ・ゴメス著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』にみる A・ヴァリニャーノの指針」 上智大学人間学紀要 (40) 2011 年
- 高橋裕史「イエズス会東インド管区コレジヨの財源形態について」『基督教学 (37)』北海道大学 2002 年
- 高橋裕史「イエズス会インド管区の基礎的経済構造」『基督教学 (40)』北海道大学 2005 年
- 高橋裕史『イエズス会の世界戦略』 講談社選書メチエ 2006 年
- 高橋勝幸「『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』に見る A・ヴァリニャーノの適応主義布教方針」 アジア・キリスト教・多元性 (9) 2011 年
- Detlev Schaumecker 「ein barockes Jesuitenspiel ueber den ‘Christenfuersten’ Protasius von Aryma (FolgeIII) Arima Harunobu (1561-1612)」 外国語教育研究第 6 号 関西大学 2003 年
- 東京大学史料編纂所編 『イエズス会日本書簡集』訳文編之一 (下) 東京大学出版会
- 中谷博幸「ルイス・フロイス「日本覚書」におけるヨーロッパ」 香川大学教育学部研究報告 第 I 部 (102) 1997 年
- 狭間芳樹「日本及び中国におけるイエズス会の布教方策：ヴァリニャーノの「適応主義」をめぐって」『アジア・キリスト教・多元性 (3)』京都大学 2005 年
- 日埜博司「ポルトガル人ドミニコ会修道士ガスパール・ダ・クルス之見た十六世紀華南一『中国誌』再刊のための全面的再検討」 『歴史と経済 (202)』流通経済大学 2009 年
- 藤代泰三『キリスト教史』 日本YMCA同盟出版部 1979 年
- 古瀬徳雄「「ジャポニズムの諸相」—日本を題材としたイエズス会劇を中心に—」 関西大学研究紀要 第二号 2000 年
- 増永恵、西田雅嗣「『グレゴリオ十三世伝』にみられる日本のイエズス会の教育施設の図について」 日本建築学会 近畿支部研究発表会 2014 年
- 松田毅一『近世初期南蛮史料の研究』 風間書房 1967 年
- 松田毅一 監訳『一六・七世紀 イエズス会日本報告集』第 I 期 1 巻 同朋舎出版 1987 年
- 松田毅一 監訳『一六・七世紀 イエズス会日本報告集』第 III 期 2 巻 同朋舎

出版 1990 年

松田毅一 監訳『一六・七世紀 イエズス会日本報告集』第Ⅲ期 5巻 同朋舎

出版 1992 年

松田毅一『キリシタン時代を歩く』 中央公論社 1981 年

松田毅一『大村純忠伝』 教文館 1978 年

松田毅一著作選集『ヴァリニャーノとキリシタン宗門』 朝文社 2008 年

松田毅一「パードレ・ルイス・フロイス著「日本史」の研究—新写本の出現に就いて—」『天理大学学報 14 (1)』1962 年

松田毅一『日本歴史学会編集 日本歴史 第 214 号』「ルイス・フロイス著 「日本史」に関する新史実」吉川弘文館 1966 年『世紀 (162)』1963 年

松田毅一「日本史上のルイス・フロイス師」『世紀 (162)』1963 年

マッテオ・リッチ、アルヴァーロ・セメード『中国キリスト教布教史 (2)』大航海時代叢書 第二期 (9) 1983 年

村上真、金井圓編著『日本古文書学論集 11』近世 I 吉川弘文館 1987 年

村上直次郎訳 柳谷武夫編 『イエズス会士日本通信；上』雄松堂書店 1968 年

村上直次郎『イエズス会日本年報』 上新異国叢書 2002 年

森洋子『カップルと子どもの美術史』日本放送出版協会 2002 年

吉田小五郎『キリシタン大名』 至文堂 1954 年

結城了悟『フランシスコ・ザビエルから今日まで日本とヴァチカン』 女子パウロ会 1989 年

結城了悟『ザビエルからはじまった日本の教会の歴史』 女子パウロ会 2008 年

E・ヨリッセン著 松田毅一訳 『フロイスの日本覚書』中央公論社 1983 年

「日本的な教会を目指したヴァリニャーノ—日本における一六世紀の宣教思想」De Luca Renzo カトリック研究 1999 年

矢沢利彦『イエズス会士中国書簡集 (4)』 平凡社 1973 年

山内昶『青い目に映った日本人』 人文書院 1998 年